

240 日本建築協会 2040委員会

2040 FUTURE VIEW vol.1

CC BY-NC-ND 4.0 国際 2020年 1月 発行
〒540-6591 大阪市中央区大手前1丁目7番31号OMMビル7階B室
tel : 06-6946-6981 fax : 06-6946-6984
e-mail : hensyu@aaj.or.jp
<http://www.aaj.or.jp/>



 The Architectural Association of Japan

CC BY-NC-ND 4.0 International
OMM Building 7F room B, 1-7-31, Ohtemae, Chuo-ku,
Osaka-shi, Osaka 540-6591, JAPAN
tel : +81-(0)6-6946-6981 fax : +81-(0)6-6946-6984
e-mail : hensyu@aaj.or.jp

240  FUTURE VIEW vol.1



About “2040”

なぜ、未来を思考する？

社会は急激に変化している。地球の裏側で起こったことが瞬時に伝わり、日々の生活に大きな影響を受ける時代に私たちは生きている。

グローバル化の進展に伴う効率化や利便性向上の恩恵を受け一方、地球環境の悪化や貧困、格差問題が世界各地で顕在化している。このような社会状況において、私たちはどのような対応が可能なのか・・・

どのような選択を行うにせよ、現実を直視することからしか判断できない。だからこそ、私たちは取り巻く状況である「社会」に目を凝らし、これからあるべき姿を見据える必要があるのではないか。「次代 (Next Era)=2040年」のあるべき姿を思考（志向、試行）するために。

なぜ、「2040」を思考する？

昨今の時代の変化は急速に進んでいる。特にコンピュータテクノロジーの発展は目覚ましく、AI（人工知能）の性能は飛躍的に進化している。レイ・カーツワイルが提唱したシンギュラリティ、すなわち AI が人間の知能を超える次元に到達する時期が、2045年ごろと言われている。

一方、未来に大きな影響を与える社会問題である地球温暖化に対し、世界は動き出している。ヨーロッパでは温暖化ガスを発生させない電気自動車の義務化を進めており、2040年からはガソリン車の販売を禁止することをすでに決定している。

2040年を時代の変換点と仮定するなら、その時代をけん引する年代で迎える現在40歳前後の我々2040委員会メンバーが思考することは必然であり、また義務であると考ええる。

どのようなスタンスで、未来を思考する？

2040年を思考するにあたり、我々がすべきことは2040年の社会を予想することではない。その時代を担うプレイヤーとして、迎える時代に向き合うであろう問題点を予測し、今からその問題点に取り組むための準備を行うべきと考える。未来を予想し、悲観することは我々のやるべきことではない。社会が抱える問題点に対して向き合い、その結果として目指すべき2040年の社会像を創造することこそが、我々の活動の目的である。

※「日本建築協会」について

2040委員会が属する（一社）日本建築協会は建築設計事務所、建設業をはじめ建築関係の各分野から参加する、広く社会に貢献することを目的とした一般社団法人です。2017年に創立100周年を迎え、「未来創生プロジェクト」を立ち上げ、これまでの建築団体にはない、次世代を見据えた若者による新しい試みを行なっています。

Member of "2040" (since 2018)

未来を想像（創造）していくボーダレスなメンバー

私たち、2040 委員会は、（一社）日本建築協会に属している 30 代後半～40 代前半のメンバーにより、2040 年がどのような社会になるのか、未来像を描こうと日々想像、議論しているグループ。



氏名： 所属：	國本 暁彦 竹中工務店	中島 慎一 徳岡設計	平野 耐仁 東畑建築事務所	サブリーダー 中村 祐記 大林組	リーダー 駒井 陽次 Style-A	清原 健史 安井建築設計 事務所	吉永 規夫 Office for Environment Architecture	黒川 祐樹 日建設計
"2040"の キーワード 興味：	私たちは何を 望みたいのか？	成長の時代を 超えた人・地 域・社会の姿	人間の可能性。 世の中の進化。 そして幸福とは。	テクノロジー が生み出すポ スト資本主義	新たな価値観 が創り上げる 豊かな社会	めっちゃくちゃ 楽しい60歳って？	環境と建築の 距離について	人とテクノロ ジーの幸せな 関係

Step towards "2040"

2040 委員会は "2040" を創生していく

私たちは、以下の活動を経て、社会が抱える問題点に対して向き合い、目指すべき 2040 の社会像を創造していく。

STEP 0

2040をブレストする

「2040 年の社会」についてメンバーでブレインストーミングを行う。出てきたキーワードを分類・整理を行い、向き合うべき課題を共有する。



STEP 1

2040を討論する

「2040 年の社会」という未来との関わり・視点について関連分野の方々
と討論を行う。キーワードを深めていくと共に視野を広げていく。



本誌 掲載STEP

STEP 2

2040を展開する

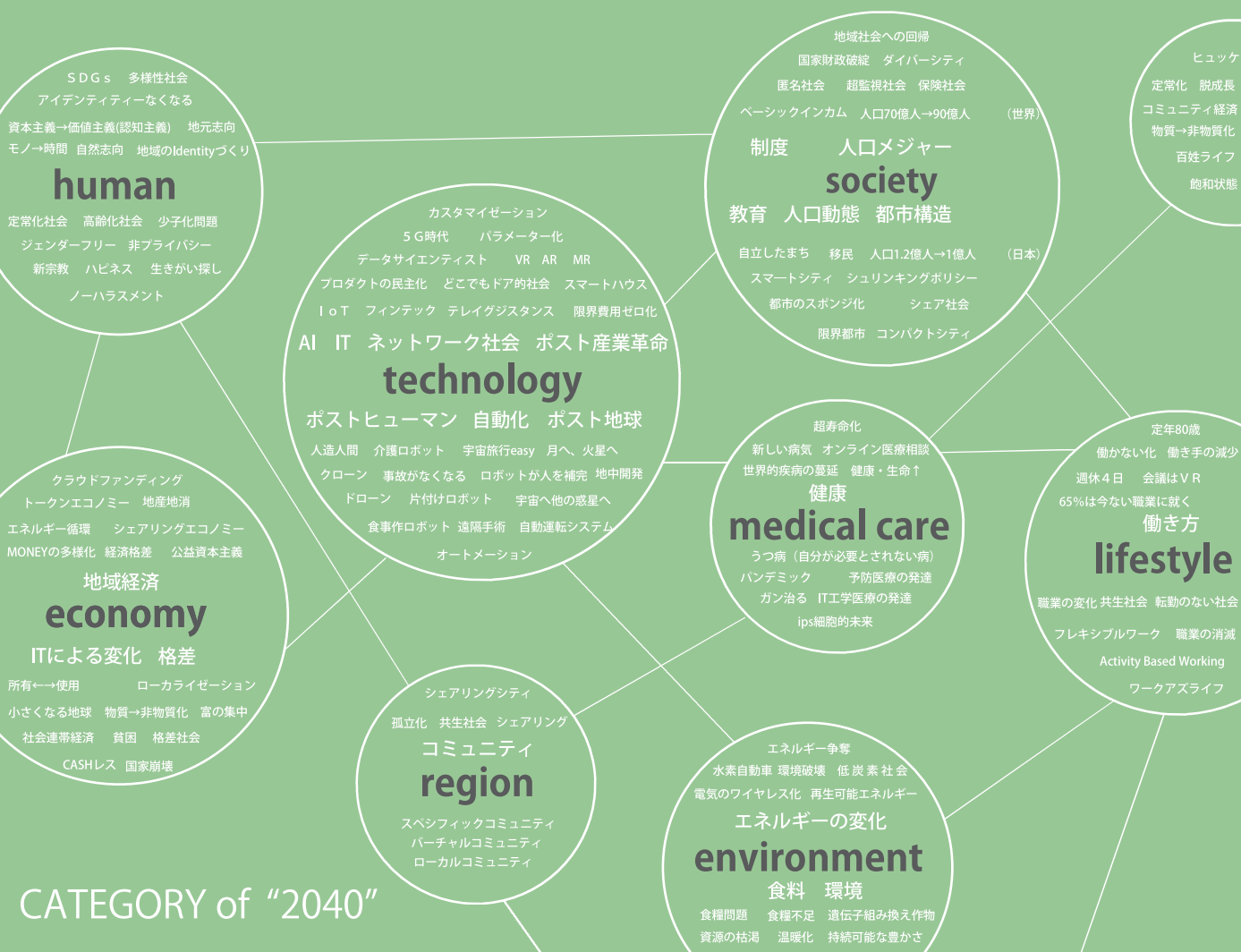
「2040 年の社会」についての活動を委員会の外へ広く展開する。建築に限らず様々な分野からの視点を加え、より広い視点で創造的に 2040 年について考える場を作り活動を拡張・深化させる。



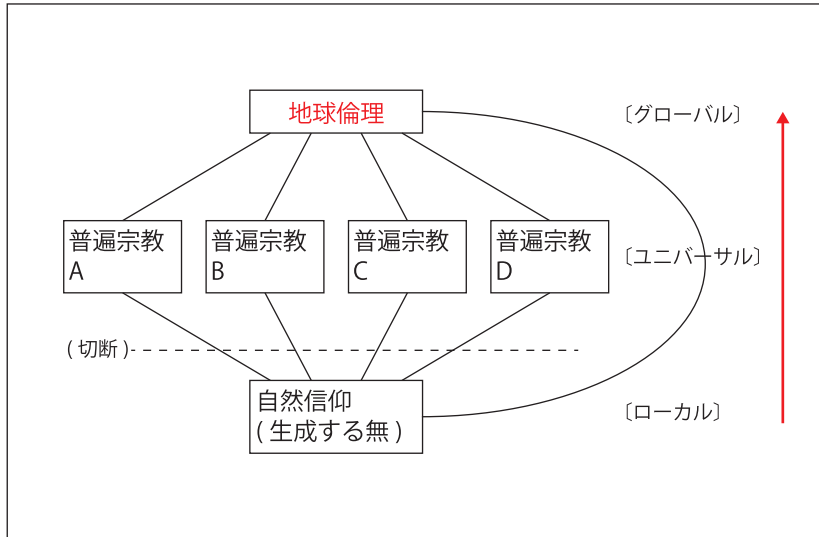
STEP 3

2040を創造する

「2040 年の社会」について、メンバーで考える 2040 年のあるべき社会像とそこに向かうための指針を提言し、実践する。



- | | | |
|--|---|---|
| <p>01 広井 良典
Yoshinori Hiroi</p>  <p>研究・教育者</p> <p>human · medical care
定常化社会</p> | <p>02 原 圭史郎
Keishiro Hara</p>  <p>研究・教育者</p> <p>society · environment
未来人になりきる</p> | <p>03 森田 浩史
Hiroshi Morita</p>  <p>企業人</p> <p>technology · human
未来からみた普通</p> |
| <p>04 岡崎 義典
Yoshinori Okazaki</p>  <p>企業人</p> <p>technology · economy
企業がつくる未来</p> | <p>05 家入 龍太
Ryota Ieiri</p>  <p>ジャーナリスト</p> <p>technology · society
新技術の発信</p> | <p>06 林 厚見
Atsumi Hayashi</p>  <p>経営者</p> <p>economy · lifestyle
幸せを妄想</p> |
| <p>07 吉川 雄一郎
Yuichiro Yoshikawa</p>  <p>研究・教育者</p> <p>technology · human
ロボットとの共生</p> | <p>08 長尾 謙吉
Kenkichi Nagao</p>  <p>研究・教育者</p> <p>economy · society
都市から経済を読解</p> | <p>09 山下 正太郎
Shotaro Yamashita</p>  <p>企業人</p> <p>lifestyle · human
デジタルテックシティ</p> |



地球倫理と普遍宗教 / 自然信仰との関係構造



広井良典

Yoshinori Hiroi

経歴

- 1961 : 岡山生まれ
- 1986 : 東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了
- 1986-96 : 厚生省勤務
- 1996 : 千葉大学法経学部助教授
- 2001-02 : マサチューセッツ工科大学 (MIT) 客員研究員
- 2003 : 千葉大学法経学部教授
- 現在 : 京都大学こころの未来研究センター教授

Action of Hiroi

AI が予測した幸せな持続可能な未来

2017年9月に日立製作所との共同研究で「AIの活用により、持続可能な日本の未来に向けた政策を提言」を発表した。AIを用いたシミュレーションにより、2万通りのシナリオの分類やシナリオ間の分岐の順序や時期、要因の特定を行うとともに、2050年に向けた望ましい未来シナリオとして、持続可能な地方分散型シナリオ（出生率が持ち直して格差が縮小し、個人の健康寿命や幸福感が増大する）を提言した。望ましい方向へすすむかどうかの分岐点は今から7~9年後になるという。

Eye to society

定常型社会＝持続可能な福祉社会

高齢化、人口減少のフロントランナーである日本が目指すべき社会像として、多極集中のビジョン「定常型社会＝持続可能な福祉社会」を提言する。

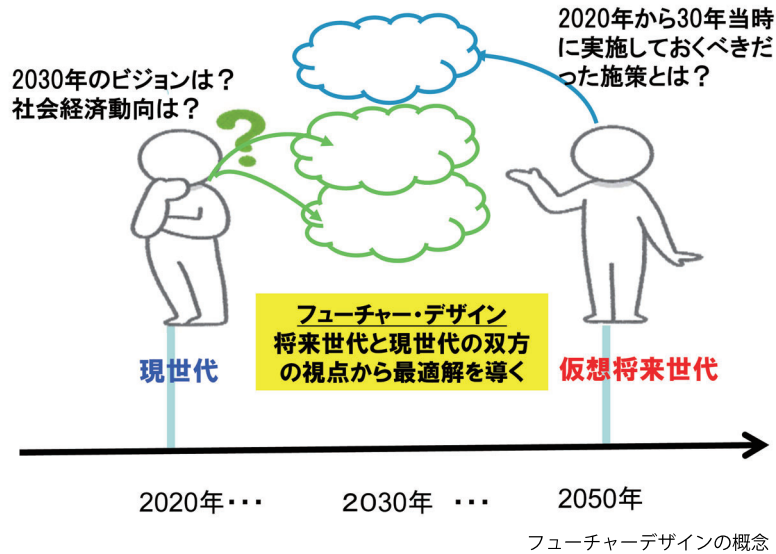
現在取り組んでいる、かつてコミュニティの中心であった鎮守の森と自然エネルギー拠点の整備等を結びつけ地域内経済循環を目指す活動「鎮守の森・自然エネルギーコミュニティ構想」は、自然エネルギーと自然信仰、コミュニティが一体となった伝統文化を結びつけたものとして日本が世界に誇れるビジョンとなることを目指している。

Eye to future

産業化社会の定常化と地球倫理

近代科学と民俗学・歴史学を大きな視野で統合した新たな科学のあり方を指摘するとともに、エネルギー革命や地球脱出、人間そのものの改造は根本的な解決にならないのではないかという疑問から、狩猟採集社会での自然信仰、農耕社会での普遍宗教に対して、定常化した産業化社会で必要とされる価値原理として「地球倫理」の必要性を説く。均質化ではなく風土的・文化的多様性を理解し把握することが真のグローバルであるとし、地球倫理により真のグローバルな次元で普遍宗教（ユニバーサル）と自然信仰（ローカル）を総合化し、地球的公共性や地球的スピリチュアリティを獲得できるという。

聞き手 黒川祐樹



原 圭史郎

Keishiro Hara

経歴

1975：熊本生まれ
1999：東京大学工学部都市工学科卒業
2001：東京大学大学院新領域創成科学研究科修士課程修了
2004：東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程修了
地球環境戦略研究機関、経済産業省製造産業局

現在：大阪大学大学院工学研究科
附属オープンイノベーション教育研究センター 准教授
(フューチャー・デザイン部門長)



Action of Hara

将来世代の立場から社会の有り様を構想するフューチャー・デザイン研究

ヒトの持つ近視性や楽観性を乗り越えた、将来世代の視点を踏まえた意思決定を導くための「フューチャー・デザイン」の研究者。持続可能な意思決定を導くため様々な社会の仕組みをデザインすべく多様な専門分野の研究者と連携し、学際的な研究を進めている。また、これらの研究成果を応用し、自治体や産業界など多様なステークホルダーとも連携しながら実社会の課題解決に向けてフューチャー・デザインの応用実践を進めている。

Eye to society

持続可能社会の実現には近視的や楽観性を乗り越えた意思決定が必要

ヒトの近視性や楽観性、あるいは将来世代の利益を反映できない市場や民主制など現代の社会システムの下では、持続可能な社会を将来世代に引き継ぐことは難しい。フューチャー・デザインでは、持続可能な社会実現のための様々な社会の仕組みを構築しようとしている。「仮想将来世代」はそのような仕組みの一つであり、その有効性が研究や実践を通じて明らかになりつつある。複数の自治体では、政策立案の中でも「仮想将来世代」の枠組みや手法を導入し始めている。

Eye to future

フューチャー・デザインの実践を展開する

フューチャー・デザインの枠組みや方法論は既に自治体や産業界などで導入が始まっている。また、自治体の中には、フューチャー・デザインを政策に応用していくための新たな機構の設置を検討するところも出てきている。社会の中でフューチャー・デザインを応用実践していくためには、教育も重要だと原氏は考えている。高校の授業や大学の講義においても「将来から今を考える」という考え方を取り入れ、持続可能な社会のデザインをけん引する人材が今後ますます重要となるだろう。



宅配ロボットと遠隔コミュニティーデバイスによる実証実験

森田 浩史

Hiroshi Morita

経歴

1972：千葉生まれ

1995：早稲田大学理工学部応用物理学科卒業

2005：米国ペンシルベニア州ピッツバーグ大学経営
大学院にて MBA 取得

現在：Head of Innolab / Chief Producer



Action of Morita

テクノロジーを使ったプロトタイプづくり

2011年に森田氏が立ち上げた組織「イノラボ」は、研究でも調査でもないテクノロジーを使ったプロトタイプづくりをミッションとしている。

世界中から先端技術をオープンイノベーションで集め、それをまずカタチにし、カタチになったら、実証実験を行うことで、その可能性を世に問う組織を率いている。

Eye to society

人とロボットが補完し合う社会

森田氏は人の能力がロボットと繋がることによって、お互い能力を補完し、より能力を発揮する機会が広がっていくことで、社会全体の能力が拡張していく世界観を肯定する。

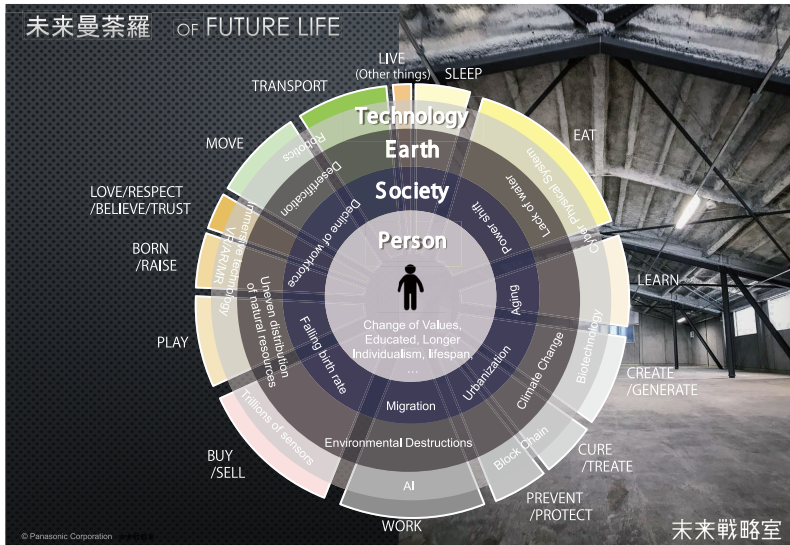
実際に、宅配ロボットと遠隔コミュニティーデバイスによって、カフェから事務所までの宅配実験を行い、それを踏まえて都市部や過疎地におけるラストワンマイルの課題解決や自律走行技術の更なる発展、ロボットを活用した様々なサービスの実現に向けての活動を視野に入れている。

Eye to future

未来から見て普通なことをつくる

森田氏は未来に向けて創造を行う時「今から見た新しいこと」ではなく、「未来から見て普通なことをつくる」という思想が重要と考える。「未来の普通をつくること」は「未来が良い世の中になると思えることをつくること」につながると森田氏は言う。

テクノロジーの進化によって変わるものを人だけではなく、まちの在り方や食の在り方、モビリティ、サービスと多岐にわたることから、森田氏は様々な実証実験に力を注いでいる。



未来曼荼羅



岡崎 義典

Yoshinori Okazaki

経歴

1978：広島生まれ

2002：和歌山大学システム工学部環境システム学科卒業

2007：神戸大学大学院経営学研究科修了

現在：パナソニック株式会社 コーポレート戦略本部

経営企画部 未来戦略室 未来戦略課 課長

Action of Okazaki

攻めと守りの未来シナリオ

パナソニックに2017年設置された「未来戦略室」は、社会構造の変化を把握し、長期的視点から経営を見つめるための未来シナリオ策定と、将来への種まきがミッションだ。シナリオプランニングにより多様な未来像を描出し、バックキャストに重点を置き検証している。社外コワーキング施設「100BANCHI」では、野心的なプロジェクトを積極的に展開。これらの目的は、同社にとってのビジネス機会と脅威を客観的に描出することにある。注目すべき5つの切り口（人口動態、都市化、消費の変化、中国、技術イノベーション）から描かれた幅広い未来像は、グローバル企業らしい攻めと守りのバランスを備えている。

Eye to society

人々のくらしとテクノロジー

人々のくらしがテクノロジーによって今後どう変化するのか注目している。テクノロジーによる人間の気持ちの把握や環境のパーソナライズ化が可能となり、これまでの単純な快適性ではない「ウェルビーイング」が実現し、住環境やくらし方自体が大きく変わる可能性を秘めているという。家電がやがて姿を変え、建材・建具に姿を変えて空間に「インフィル化」していくという見方も。地方への視点では、厳しい現実を目の当たりにしつつも、藤沢市や会津若松市、オガールなどの例をあげ、テクノロジーの援用によるコミュニティ活性化・行政による住民サービスの向上もできうるとして、決して悲観論には与していない。

Eye to future

変わるもの・変わらないもの

やみくもに事業規模だけを追求する成長ありきの企業活動ではなく、社会的課題の解決の結果として利益や成長は後からついてくる。パナソニックでは顧客・社会価値の創造を「お役立ち」と呼ぶ。「お役立ち」実現の手段である事業内容やビジネスモデルは、時代の変化に合わせた変革が必要だが、バックボーンである企業理念は、今後も受け継いで変わらないものであると語る。創業者・松下幸之助の理念が、100年の歳月を経てなお深く根づいていることが、とても印象的であった。

聞き手 國本暁彦



施工管理で使用される Holo Lens



超小型ドローンによる配管内点検



家入 龍太

Ryota Ieiri

経歴

1959：広島生まれ
1982：京都大学工学部土木工学科卒業
1984：米国ジョージア工科大学大学院工学修士課程修了
(Engineering Science & Mechanics 専攻)
1985：京都大学大学院修士課程修了 (土木工学専攻)
日本鋼管 (現 JFE エンジニアリング)
日経 BP を経て
現在：株式会社イエイリ・ラボ代表取締役

Action of Ieiri

建設 IT ジャーナリストとして建設産業の成長戦略を追究

BIM/CIM や i-Construction、AI などの導入により、生産性向上、地球環境保全、国際化といった建設業が抱える課題を解決するための情報を「一歩先の視点」で発信し続ける建設 IT ジャーナリスト。情報発信の手段も、出版物という形態ではなく、WEB ブログや、毎週配信の無料メールマガジンで発信。また、企業や学生向けの講演を行い、スピーディーな時代に対応した、タイムリーな情報発信を行う活動を続けている。

Eye to society

設計・建設においても IT 化・オートメーション化が波及

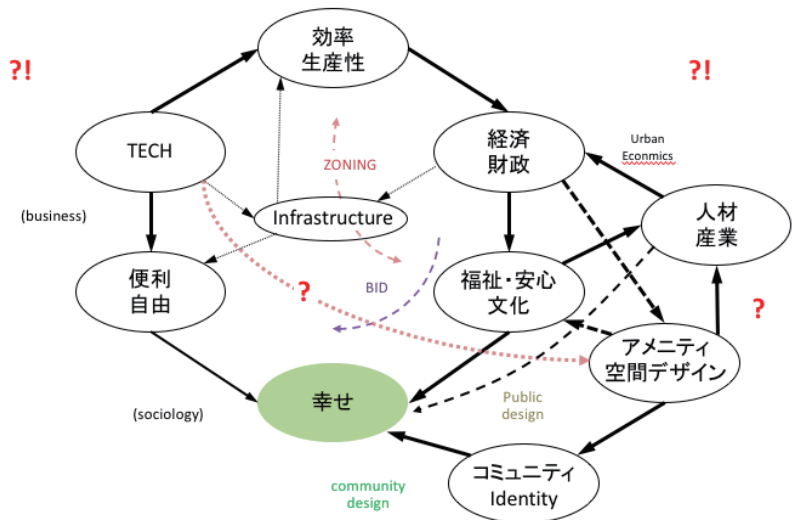
労働人口が減少して省人化が求められる中で、自動車産業など同様のオートメーション化が、建設産業にも波及しつつあると指摘。また、設計や街づくりにおいても、外資系や IT 系などの参画の兆しがいくつか見られ、デザインにおいても、ビッグデータの中から多様なパターンを自動的に生成できるソフトの開発も進みつつある。BIM/CIM とオートメーション化とは、非常に相性がよく、何かのきっかけであらゆることが一気に浸透するのでは、と予測している。

Eye to future

他分野も含めた新技術による新たな可能性

建築や街についても、クラウドやシェアリングの考え方が身近になり、家やオフィスを所有するという考え方も変わりつつある。新しい技術が人々に浸透していけば、より多様で選択肢の多い時代を迎えると期待。また、橋やトンネルの老朽化や、災害時のインフラの早期復旧においても、ドローンやシミュレーションの導入が、人々の安心・安全を支える。

技術の進歩により、建築や街がより良いものになっていく可能性は、未知数に広がっている。



都市の幸福についての力学イメージ



林 厚見

Atsumi Hayashi

経歴

- 1971：東京生まれ
- 1995：東京大学工学部建築学科（建築意匠専攻）卒業
- 2005：コロンビア大学不動産開発科修了
マッキンゼー・アンド・カンパニー、
株式会社スペースデザイン取締役を経て
現在：SPEAC 共同代表 / 東京 R 不動産ディレクター

Action of Hayashi

建築家とは別のアプローチで、まちをかえる

林氏の目的は、楽しくこだわりのある空間を世の中に増やし、そこに人が集まるということ。そのため
の場や仕組みを事業として作る、デザインの世界とリアルな現実社会とのあいだで動くプロデューサー
として活動している。例えば、東京R不動産は、新しい視点で個性ある不動産や賃貸物件を紹介してい
く面白い不動産屋であり、人間的で楽しい空間をつくるための仕組み・インフラを構築する事業（コワー
キングスペース&コミュニティの運営など）も展開している。

Eye to society

これからの都市の幸福について、少し視野を広げていくつかの切り口に着目

何が人々の幸せな都市生活に寄与するのか整理された力学イメージ図がある。左上の TECH は、利便と
自由な時間を生み出し、人口減少における財政破綻を一番解決するための力となりえることを示してい
る。右下はアメニティや空間をうまく作ることがコミュニティの健全な維持に寄与し福祉や安心を解く
こともできると考えられる。また地方に魅力的な公共空間があることは、キーパーソンとなる人材を定
着させ、既存の地場産業をアップデートして成長させることにつながるなど、社会を捉える視野を少し
広げると新たな発想ができる。

Eye to future

まちの幸せとその持続において必要なことを妄想する

林氏は、都市を空間的な面で面白く楽しくするだけでなく、それぞれのまちがいかたちで持続するわ
くわくするソリューションを考えている。新しい生活像や人生観を体現しているローカルヒーローたち
を巻き込んでライフスタイルや人のアピールをしていくことや、社会課題を解くために新しいルール設
定を民間から提案し、提案した事業者が自らそれを事業にしてフロンティア利益を得るようなかたちを
つくることなど、既存概念を打ち破る妄想を開始し、たのしく魅せて、制度やまちをかえていく。



コミュニティ対話ロボット「CommU (コミュニー)」

吉川雄一郎

Yuichiro Yoshikawa

経歴

1977：大阪生まれ

2005：大阪大学大学院工学研究科
知能・機能創成工学専攻修了

現在：大阪大学基礎工学研究科准教授



Action of Yoshikawa

人型ロボットによるコミュニケーション研究

吉川氏が属する大阪大学基礎工学部石黒研究室は、日本でも有数のロボット研究の先鋭として知られている。ロボット研究と聞くと、人間に近いアンドロイドの実現を模索していると思いきや、そうではない。むしろ逆に人の要素を切り落としながら、人がコミュニケーションを通じて「人と会話している」と感じるために最低限必要なロボットの姿や振る舞いを追求している。

Eye to society

ロボットから見る「シンギュラリティ」

2040~45年ごろには「シンギュラリティ」に到達し、AIが人間を凌駕する、とされている。現在でもAmazonのAlexaのように、人の質問に答え、依頼ごとを解決するAI機器が世の中に登場しつつある。では、AIが生活に浸透していく中で、ロボットの存在意義はどこにあるのだろうか。

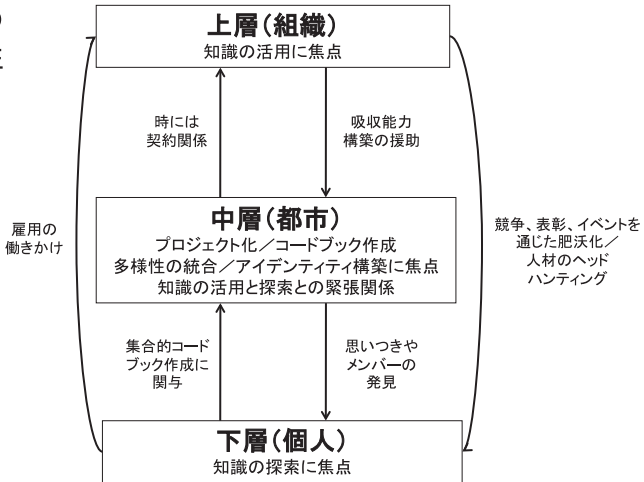
人間はものに親和性を感じるためにある程度の人型が必要となることを、研究を通じて石黒研究室は明らかにしている。Alexaのようなアイテムとの言葉のやりとりは、会話ではなく、ツール使用のためのやり取りに過ぎない。一方、ロボットのように人型をかたどることで、人は親しみを感じ、実際に人と会話をしているように感じる。ロボットがうなづいてくれるだけで、「話を聞いてくれている」と人は感じる。AIなどのテクノロジーを肯定的に人が受け入れる過程に、ロボットが寄与する役割は大きい。

Eye to future

近未来における「ロボット社会」とは

吉川氏が語るロボット社会、それは、人間の役割をロボットが乗っ取るようなものではない。むしろ、今の時代で表現すると、一家に一台、ペット兼スマートフォンとしてのロボットの存在をイメージしている。AIに代表されるコンピューターテクノロジーがロボットとして登場することで、人はより身近に、有効（友好）的にテクノロジーの恩恵を受けとれるようになると考えられる。2040年、我々の周りには、能力は違えど親しみを感じる「ドラえもん」的なロボットがあふれているのかもしれない。

都市の創造性



コアンデラ (2010) をもとに作成く長尾・笹島 (2012) >

長尾 謙吉

Kenkichi Nagao

経歴

1968: 大阪生まれ

1995: 大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得

2010: 大阪市立大学大学院経済学研究 教授

現在: 専修大学経済学部 教授



Action of Nagao

資本主義の変容

経済地理学を専門とする長尾氏は、経済学の領域の多くが空間 - 時間のない抽象化された一点の世界を前提としているのに対し、空間や地理など現実的要素を組み込んだ視点から経済を捉えようとしている。氏の考えによれば、経済活動の変容は、私的所有と資本蓄積をその根幹とする資本主義の仕組みの中においてあくまで生じている。現代は、製造業中心の産業資本主義から知識集約型経済である認知資本主義への移行が生じている。

Eye to society

都市の行方

都市が持つ規模、密度、多様性、匿名性、開放性といった特性は、認知資本主義的状况において、その重要性がますます高まっている。交通通信手段の発達に伴い、時間と空間が圧縮されて地球が小さくなり「距離の死」や「都市の死」などと言われているが、ことは単純ではない。経済活動がグローバル化しようとも、人々の日常生活は拮据の制限があり、人間の活動は基本的にローカルである。大都市は多様な人々の生活の舞台となり、組織や価値観の違う人々と直で対話しやすく「おもしろいものや新しいものは都市から始まる」のである。

Eye to future

技術、組織、地理を「三位一体」に見据えて、未来を考える

先進諸国では「平均の終焉」と言われるように中間層が縮小しさまざまな格差が顕在化している。技術決定論に「都市の死」を展望したり、また単純にローカル回帰を唱えるのではなく、「技術 - 組織 - 地理」という3つの要素が相互規定的に展開していく関係性を捉えて未来を考える必要がある。生活の舞台となる都市や地域に関しては、所得や生産性に傾斜しすぎた価値観の見直しも必要であり、「社会連帯経済」を含めて「市場 - 互酬 - 再配分」の構成を考えることや、地域の特性にあわせて細分化・専門化・分業化を進めるだけではなく相互カバーする「ごちゃまぜ」の構築を図ることが大切となる。特効薬的な処方箋というもの存在せず、(シンク+アクト) × (グローバル+ローカル) することが重要である。

聞き手 國本暁彦



山下氏が編集長を務める雑誌「WORKSIGHT」

山下正太郎

Shotaro Yamashita

経歴

2007：コクヨ株式会社入社

2011：『WORKSIGHT』創刊

2016-17：ロイヤル・カレッジ・オブ・アート
ヘレン・ハムリン・センター客員研究員を兼任

現在：コクヨ株式会社WORKSIGHT編集長
クリエイティブセンター主管研究員



Action of Yamashita

自ら世界各地で見聞きした豊富な知識を元に、未来のワークプレイスを語る

山下氏はコクヨ株式会社に属しつつ、世界各地のワークプレイスを年間100件以上訪れ、働く場や働き方の変化を調査している。その調査結果をまとめた『WORKSIGHT』を発刊し、世界のワークプレイスの潮流を研究的観点から分析している。氏は、ワークプレイス設計者の立場を保ちながらも、未来のあるべきワークプレイスを模索している。

Eye to society

「ワークプレイスのデジタル化」が行きつく社会像

今、世界で進んでいる「ワークプレイスのデジタル化」は、単に仕事を効率化するというレベルではなく、ワーカーの仕事や生活全てをデジタル化するものとして発展してきている。中国ではアルゴリズムとパラメーターでオートマティカルにデザインされたオフィスができ、その内部の至るところにセンサーが配置され、ワーカー達の習慣や好みを収集したデータからAIが先読みし、オフィスレイアウトが変わっていくような事例も実現間近とのこと。さらなる例として、Googleがトロント近郊の「Quayside」で計画している「アイデア」プロジェクトでは、街全てをスマート化し、あらゆる情報を収集、管理するデジタルテックシティができようとしている。ワークプレイスのデジタル化は、ワーカーの全てを情報化し、デジタルプラットフォームの管理下に置こうとしている。

Eye to future

デジタルプラットフォームの是非

一方、このようなデジタルプラットフォームにNoを突き付けているのがEUである。EU内では、個人情報の利用にGDPRといった規制を設けつつも、個人データを自分の意志で社会に利活用する社会実験DECODEをアムステルダム、バルセロナ、ロンドンにて行っている。

このような動きの中、日本のワークプレイスはスマートの文脈で完全に後れをとっている。日本人の気質としては、元来それほど強い個人情報保護意識はなく、デジタルプラットフォームの下に置かれる方が安心できるかもしれないが、果たして本当にそれがよいのか。未来の日本のワークプレイス、ひいては日本社会は、日本人各々が自分の意志を示すことができるか否かにかかっている。

STEP 0・1『2040をブレスト・討論する』を経て

今まで、漠然と未来をみていた私たちが、2040年の社会についてブレストし、導き出したキーワードは想像の域を越えるはずもない。しかし、2040年の社会を見据えるにあたり、掘り下げるべきカテゴリは浮かび上がった。カテゴリは、多岐にわたるが、多くが影響し合い、一つの領域内で語る事ができないことも明確になった。

(STEP 0)

掘り下げるべきカテゴリの先駆者の視線は、私たちの想像を越えるものばかりであった。2040年の社会においては、資本主義社会の価値観は過去のものとなり、テクノロジーは飛躍的な進化を遂げているであろう。その社会は、人を豊かにもするが、人を翻弄するかもしれない。だからこそ、これからの社会を牽引する私たち世代が、多くの視点を結集させ、各々が感性を磨き、あるべき2040年の社会像を創造していくべきと感じた。

(STEP 1)

STEP 2『2040を展開する』に向けて

STEP2 では活動の場を委員会の外へ広げ、多くの視点を結集し、思考を深め感性を磨く様々な活動を行う。

プラットフォーム

2040年について興味を持つ同世代の様々な分野の人々が自由に集まり、議論を深め、共に活動を考える場をつくる。
EX) 未来を志向している他のグループとの交流会を行う。

フィールドワーク

“2040”を通じて得た知見を実際に体験し、その可能性を体感する。
EX) 最先端ロボット等の新しいテクノロジーを実際に見学・体験してみる。

コラボレーション

2040年の社会について分野を超えて思考を共有し、その思考に基づいた活動を共に試行する。
EX) 地域の社会問題に新しい切り口で解決をはかる手段を試行する。

“2040”と未来を語ろう

私たちは今後、未来に興味がある幅広い人たちと未来を共に想像（創造）していきたいと考えています。もしこの冊子を読んで興味を湧いた方、建築関係であるか否かは関係ありません。ぜひ一緒に活動しましょう！

編集後記

駒井 陽次
Style-A
(リーダー)

まだ先のように思えるが、すぐに迎える 2040。スマートフォンは、生活だけでなく人の感覚を大きく変えた。価値観を変えつつあるといってもいい。その価値観の変化が今後も加速することを、9名の方々のお話を伺い確信した。AI・ロボットの進化や資本主義の崩壊など、人類が経験したことも想像してこなかった時代になる。その時代をしっかりと見据え、建築の可能性を更なるものにするために、今後も私たちは、思考し、試行していこうと思う。

中村 祐記
大林組
(サブリーダー)

2040 委員会の活動を通じて、我々は「2040年」という未来を単に予見していたわけではない。現在のあらゆる分野の社会問題を洗い出し、その解決方法を模索し、その先に2040年像があると感じている。未来の萌芽はすでに現在の社会問題に内包されており、自分たちがその萌芽に目を向けられているか、を問われ続けて今に至っている。力不足を痛感しながらも、おぼろげに見え始めた2040年像には閉塞感や行き詰まりは感じられず、私はその姿にわくわくさせられている。

清原 健史
安井建築設計事務所

“今の子供たちの65%は、今存在していない職業に就くだろう”
“今後20年で、雇用の約50%の仕事が自動化されるだろう”
時代の変革期にある今、こんな未来予想を聞く機会が多い。しかし、2040年の未来は到底想定のできる社会ではないと考える。ただ“テクノロジーの発達や社会の変化の先が、どこに価値基準を置こうとしているのか”私たちは今こそ受身で対処するのではなく、課題の発見と解決に向けて、前のめりに考え、発信するべきである。

國本 暁彦
竹中工務店

将来予測がブームの呈である。書店には関連書籍が山積み。将来への閉塞感・不安感の表れだろう。ロスジェネ世代の我が身もご多分にもれずだが、そもそも人は何のために生きるのか、という根源的な問いにつながっているように思える。閉塞感に風穴を開ける可能性を感じて建築の世界に身を置いたものの、答えのない問いの濁流のただ中で、モノが竣工した際に垣間見せてくれるきらめきに、つかの間の息をつく。処方箋として果たして建築が相応しいのか、答えは五里霧中というのが現時点での思いだ。

黒川 祐樹
日建設計

変革期において20年先を言い当てることは困難を極めるが、どのような社会になっているか想像することはいくらでもできる。この2040の活動を通じて他分野の様々な方の取り組みを伺い、みんなで議論してきた。それを通じて少しずつ自分自身の視野が広がってきたように思う。今の価値観ではない新しい価値観の可能性に胸を開き続ける事で自分の価値観を自由にアップデートし続け、より良いものを生み出す源にできればと考えている。

中島 慎一
徳岡設計

2040という射程は手の届く未来（2019年現在）、委員自身だけでなく次の世代も現役で活躍している時代。それは、他人事ではなく、まさに幸せな社会であってほしい私たちの未来。社会状況の変化に追従するのではなく、変化させていくフロントランナーの方々の話は、社会の変容を予測若しくは、先行していくための一般教養（リベラル・アーツ）であり、私たちは、建築を通じて実践し、幸せな未来を紡いでいきたいと思う。

平野 耐仁
東畑建築事務所

いま上空にある風が2040年どこにいるのか。そんな議論にも近い。到達点は想像もつかない。これが素直な感想だ。ただ、幅広い他分野の方々から、いまの風向きは何となく感じ取れた。明日の風向きはまた変わるだろうが、最前線の方々、人間の可能性や世の中の進化と真摯に向き合っている姿が印象に残った。時間、空間、価値など、個々人が自由にカスタマイズできる多様化を極める時代。それぞれの生き方が問われていくことを実感している。

吉永 規夫
Office for Environment Architecture

「来年の事を言えば鬼が笑う」と言われますが、2040委員会で文字通り2040年について議論してきました。ジャンルや立場が異なれば、思い描く将来も当然異なり、お聞きした話の差異に毎回刺激を得た。建築ほど長い時間で考えないといけない、今自分がつくっている建築が2040年に古く感じないかを日々悩みながらつくり続けている。Fools set far trysts.2040年にこのメンバーで集まりたい。